

6 高津のムラ境を祀る民俗—辻切り・庚申塔・馬頭観音・咳神様

藤 由美

1 はじめに

平成 15 年秋、高津は三山の七年祭の最中にあった。11 月 2 日三山へ渡御した高津比咩神社の神輿は、翌日高津のムラウチを隈なく巡る。「花流し」の祭礼である。

花流しで神輿の渡御する範囲は、原則的にツジ（辻）と言われる地点、すなわち「辻切り」の行われる地点内で、かつて旧高津村の集落はこのツジの範囲にあった。ただし昨今のように氏子の家とその外に転居したなどはこのツジを越すこともあり、またこれらのツジのほか、庚申塔なども神輿の折返しのポイントとなっている。このように高津の「ムラ内」は時代とともに変わりながらも、花流しの神輿の渡御によってしっかりと認識されてきたといえる。

もちろんこのムラ内の外には、旧高津村の村域としてとして田畑や山林などの「内野」「内山」が広がっていた。今はその多くが自衛隊演習地や住宅地、団地へと変貌したが、かつてはムラの生産と生活を支える重要な場所でもあった。

これらの旧高津村の村域とムラ内の姿、そしてそのムラ境を祀る民俗を、行事や祭祀、石造物などの調査を通して明らかにしてみたい。



(写真1) 辻切り⑥で折り返す神輿

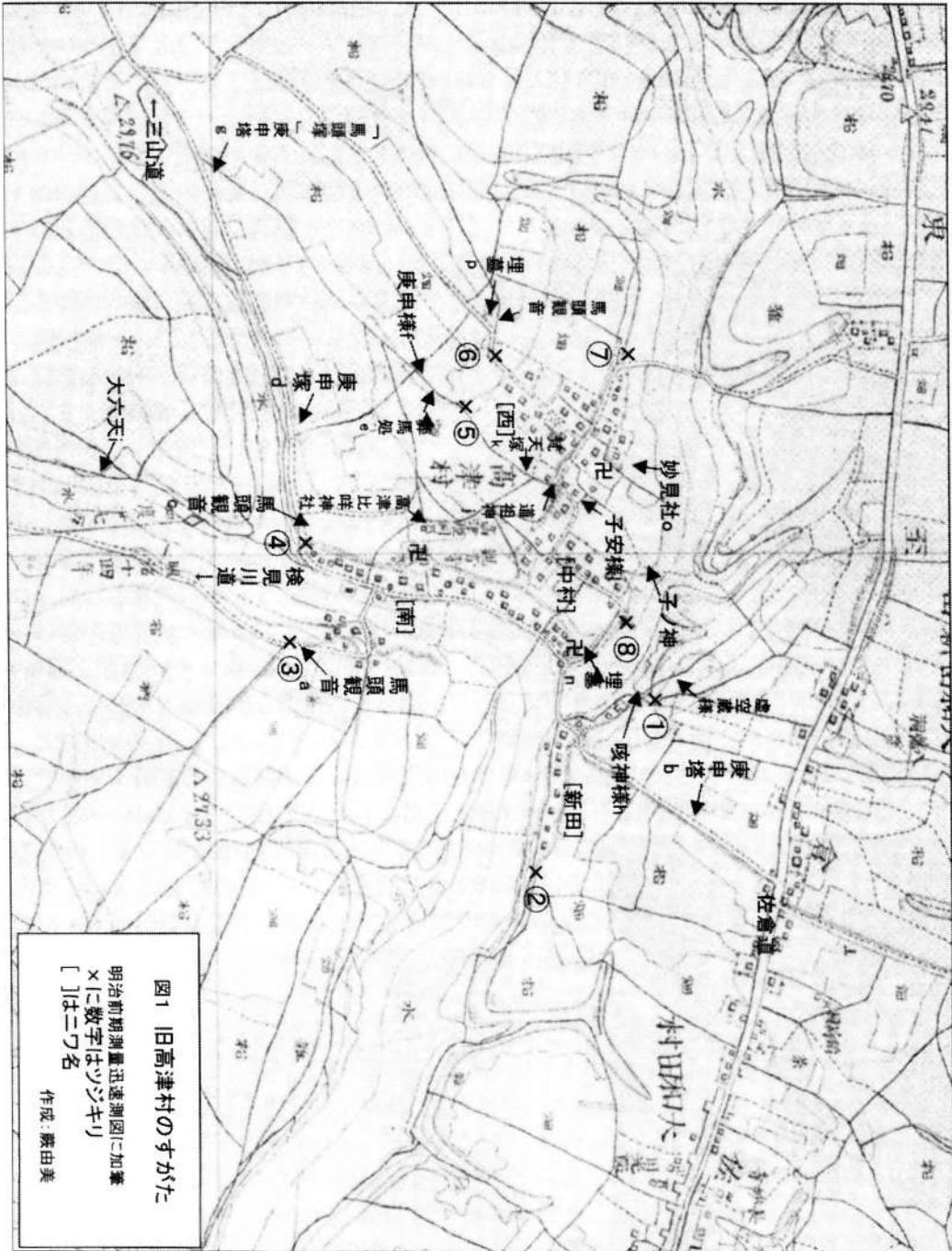
2 高津の「辻切り」

外からの邪悪な霊や疫病や災害の侵入を阻止しムラ内の平和な生活を守るため、ムラの境ではさまざまな呪術を行ってきた。高津ではムラの境を守る民俗行事として、毎年 1 月 25 日に 8 カ所の地点で辻切りが行われている。筆者は毎月晦日に高津比咩神社のオコモリ（お籠り）に集う念仏講のご婦人方からその場所や方法などをお聞きし、2004 年 1 月 25 日とその後日に調査した。（P40 図 1・P48 表 1 参照）

八千代市内では、高津のほか、小池・島田台・島田・桑納・下高野・上高野・下市場・勝田などでも行われているが、その形態は、注連縄に柁・ヤツデ・大蒜・抹香などをつるす勧請縄のタイプと、蛇をかたどったタイプ、経文を書いた板や塞神のお札を竹などに挟んでたてるタイプなどさまざまである。そのうち、勧請縄（注連縄）の形態は自動車が普及するまでは、「辻を切る」ように道を横断して設置されていたが、現在は片方の道端に丸めて置いたり、立ち木や電信柱などに輪にした縄と呪物をくくりつけたりしてある。

高津の「ムラ内」は、「中村」「南」「西」「新田」の 4 つのニワ（庭）に分かれて、地域活動の分担や祭祀の当番を行っている。辻切りもこのニワごとに行われていて、今この行事を継承しているのは辻切りの場所に近い旧家のご婦人方である。

中村・南・西の各 2 ケ所ずつでは、環状の勧請縄タイプの辻切りを行っているが、薬



に挟む呪物の中には、ヤツデ・柊・大蒜・トウガラシなどは鬼（悪霊）が嫌うもののほか、「蛇の目」といって墨で二重円を書いた半紙に線香などを包んだもののように、元は敵を威嚇する蛇形の辻切りではなかったかと想像させるものも入っている。この6ヶ所の辻切りを担当する婦人たちは、薬などの材料の入手を助け合ったりして、昔ながらの辻切りの伝統を守っていきこうと努力されていた。（写真2）



（写真2）③の辻切り

一方、新田のニワの北田では、先代からの方法で「咳神様」を祀る家の垣根の下の方にお札・ヤツデ・お米・胡椒の粒を小さなポリ袋に入れて結びとめているだけである。（①）さらに永森では高津比咩神社のお札をその家の垣根の支柱に貼るのみであった。（②）このように新田のニワでは、お札の呪力により厄を払うという簡略化された辻切りとなっている。

これらの辻切りの地点は、家々の並びが途切れて道が田畑に差し掛かる地点か、ニワ単位でその居住地を通る道の出入り口であった。そして辻切りの外側には、ソウマント（馬捨て場）、ラントウバ（両墓制の埋葬）があり、外敵ではなくても浄化されない霊は、その外に留め置かれている。（南のニワの北端のラントウバの場合は、観音堂が、鎮霊の役わりを負っているのであろう。）

なお高津の辻切りが行われる毎年1月25日は、立春を新年とした暦で前年の邪気を全て祓うための追儺の行事の盛んな時期で、また他の地域も高津と同様におおむね1月下旬に行われている。

3 馬頭観音塔と庚申塔

各ニワの出入り口を守る辻切りの外には、高津の各イエが耕作する田畑や持ち山、入会地の山林が広がっていて、その中を主要な街道に通じる道が通っている。それらの道の分岐点や隣村との境には石塔などが多く祀られているが、特に検見川道や三山へ行く道の分岐点や道沿いには、江戸時代の初期からりっぱな庚申塔や馬頭観音塔が建立され、今も旧家の方々によって香華も手向けられ大切に手入れされている。

中には外部の通行者の道案内を兼ねた道標銘の刻まれたものがある。検見川道の南端（辻切り③の向かい側）にある馬頭観音群 a は、新道開通によりまわりの環境が大きく変化しているが、今も「右けみ川 左柏井道」の道標の刻まれた明治23年銘を含む6基もの馬頭観音塔（P35 石造物供養塔の部 No.68～73）が、その左手に残った検見川道の旧道の面影とともに、道行く人を見守っている。

一方、検見川道北端の消防本部左脇「庚申様」bには、明和8年（1933）建立の庚申塔（P36No.100）と延宝2年（1674）の「下総国葛飾郡二宮庄高津村」銘の庚申塔（P36No.99）がある。ここは集落から北東の方角、すなわち鬼が出入りする方角として忌み嫌われた鬼門の方向に当たり、特に厳重な祭祀が必要なのか、今も新田のニワ

のサカシタ家が鳥居を立てて守っている。現在は高津ではなく大和田新田の地番となっていて、七年祭花流しの神輿も「辻を切ってはいけない」と必ず折り返す地点で、隣村との境を意識させる地点のひとつでもある。(写真3)

また、「南」のニワ南端の辻切り④のある場所cにも、「牛魂供養碑」と刻まれた石塔(P34No.65)と2基の馬頭観音塔(P34No.64, 66)があり、この道は西へたどるとかつては三山へと通じていた。(写真4)



(写真3) 庚申塔bで折り返す神輿

さらにここから、自衛隊習志野演習場のフェンス沿いに進むと、右側の畑の中に庚申塚dがあり、そこには庚申塔11基(P35No.87～97)と「サンヤ様」(二十三夜塔No.98)1基がある。昔は道がこの塚のすぐ下を通っていたが、その間に住宅が建って石塔群が畑の中に取り残されてしまっている。

また、辻切り⑤の先を三山に向かっていくと、ソウマントe(葬馬処)の先の十字路fにも「庚申様」と呼ばれている小さな駒型の石碑(P35No.86)がある。

三山道沿いの石塔群は、自衛隊習志野演習場内にもある。ここは戦前戦後を通じて軍



(写真4) 辻切り④と馬頭観音塔群

用地に接収され、特に近年は立ち入りが厳重に禁止されているが、八千代市郷土歴史研究会では平成10年6月と平成16年5月に、この自衛隊習志野演習場内の通称「馬頭塚」の石造物を調査した。

馬頭塚gは高さ3mぐらいの円形の塚で、塚の上にある華麗な笠付の享保と寛政年間の庚申塔2基(P35No.75.76)と手水鉢がある。(ちなみに馬頭観音塔はない。)いずれも

江戸時代の石造物として優れた意匠のもので、寛政4年(1792)の青面金剛刻像碑の台座には寄進者銘として旧高津村の主だった家の数十の屋号が、また安政5年奉納の菊紋のある手水鉢(P37社寺宝寶物No.216)には江野沢、岩井、鈴木姓の10名が金50匹ずつ出して寄進した旨が刻まれてあった。(写真5)

この馬頭塚の位置は、高津比咩神社から三山七年祭りの神輿がまっすぐ三山へ向かう道が、辻切り⑤の中村のニワからの道と合わさって、さらに辻切り④からの道が合流する重要なポイントであり、またムラの裏鬼門(南西)にもあたる。高津へのムラの入り口を守る道祖神として、この馬頭塚の2基の庚申塔はまさに民俗学的にも貴重な史跡であり、文化財としての保存と公開が望まれる。

以上のように、高津のムラを通る主要な古道の出入り口や分岐点には、17世紀半ばより庚申塔や馬頭観音塔が建てられ、特に江戸中期以降は主尊を青面金剛とし、下に三匹の猿と邪鬼、左右に2羽の鶏などを配し、大勢の村人が名をつらねた石塔が庚申信仰によって造立されている。

一方、馬頭観音は馬の頭を持つ姿で疾駆して魔物を打ち破り、衆生を救済すると信仰される観音菩薩であるが、江戸時代には生活に密着していた馬の守護仏として各地に建てられようになった。特に明治以降は馬による運送の発達とともに、交通の守り本尊としての造立が増えていくが、埋墓の傍に6基、西霊園の角にもソウマント近辺から集められた13基もの馬頭観音があり、愛馬を家族同様に惜しみ供養する高津の人々の心をうかがうことができる。



(写真5) 演習場内の庚申塔

4 高津の「咳神様」

2004年の1月25日、新田のニワの北田にある辻切りを探して旧家をたずねると「咳神様のところ」と教えられ、行ってみると成田街道に向う細い坂道の大和田新田との境手前に、家の塀にくいこむような1坪ぐらいのスペースがあり、そこに石塔(P34No.45)が1基祀られてあった。それが「咳神様」で湯飲みが供えられていたが、石塔に刻まれた銘文は判読しにくく、後日調査をする予定で、その時は辻切りとともに写真撮影だけを行った。(写真6)

その後、「近日中に撤去移転されそうだ」という情報を2月晦日のオコモリで聞いて危惧していたところ、3月14日の本会の例会で訪ねた時にはもうそのスペースがつぶされて、「咳神様」といわれた石塔はなくなっていた。幸いその地所を所有する家人から観音堂の石段の脇に移転したと聞くことができ、調べたところ銘文は「地藏堂跡」の刻字が確認され、また裏返してみると地藏像胴体部分であることが判明した。(写真7)



(写真6) 移転前の咳神様

この咳神様の伝承について、ここの辻切りを担当しているヘイシロウ家のツギさん(大正5年生れ)にお聞きすると「逃げるときに咳をしてつかまったお姫様の供養の墓で、お茶を供えようと咳が止まる」とのことであり、またオコモリの婦人方にお聞きすると「チョウベの家に働きに来ていた許されぬ仲の男女が、一緒に逃げようとして咳をして捕まり殺された」という伝承も語られ、チョウベ家のチヨさん(大正11年生れ)の家でもそ

のように伝えられているとのことであった。そして咳神様として隣にさらにもう一基石塔があり、それは観音寺の墓地に移転したが、最近、墓地在整理されて無縁墓石群の中に入れられてしまったため、どの石塔かはもう特定できないとのことであった。

石塔石仏を咳神として祭る信仰は、北総に多く見られ、船橋市の事例(註1)を綿貫啓一氏が、また印西町の咳神信仰(註2)については榎本正三氏が紹介している。筆者も会員の協力で八千代市内と佐倉市ほか近隣の事例を調べたところ、表2(P49～52)のような数多くの咳神の信仰例が採取できた。

これらに共通するのは、そのほとんどの場所がムラのはずれや境の場所で、そこで咳をして逃げそこなった人や行き倒れた旅人の霊を供養すると咳止めの利益があると伝承されていることである。

今回の調査で存在が確かめられた高津の咳神もムラの境に立地しており、また逃げそこなった人の供養のためという伝承は、北総一帯のさまざまな咳神信仰と共通するもの

であった。またこの高津の咳神の石碑は、地蔵像の下半分を転用し裏側に「地蔵堂跡」との刻字した記念碑の形態をとっていることから、元あった地点にはかつて小堂に入った地蔵像が奉られ、大和田新田との境で行き交う人々を見守っていたと想像される。

また咳神ではないが病を防ぐ神様として、自衛隊演習場の中の高津川西岸に大六天の祠がある。ここは南のニワの南端で、シチゼム家の三代位前の当主が疫



(写真8) 大六天社

病退散のため勧請したという。今も4月13日の縁日には念仏講の婦人方により「唱え」が唱和される。(写真8)

大六天は第六天とも書き、仏説では欲界の最上に位置する天魔で他人の楽しみを自在に自分の楽しみに変える力を持つたりの多い神とされているが、関東では千葉県香取郡山田町山倉大神の「山倉の大六天」が広く知られ、病魔退散を祈願する信仰が盛んだった背景がある。

5 ムラ内の範囲の変遷

ムラ内が時代とともに発展していく過程で、ムラの境も拡大する。今は旧村の真ん中にある石祠の場所も、かつては家並みの途切れた境であったらしい。

現在、高津団地行きバスの通る道にある「北向道祖神」(P35No.85)は、「ドウロクジン」と称して足の病に効くご利益があり、小さな祠ながらムラ全体で大切に守られている。この場所も、西のニワと中村のニワの境で、かつては大日さま(P35No.81, 82)を祀



(写真7) 地蔵像だった咳神様

る梵天塚kを経て馬頭塚へ直進する三山への道の入口であった。

また、この道祖神の向かいの道を北へ行くと、新しい住宅の角lに「妙正大明神」と「子安大明神」の名号が刻まれた文化年間の石祠が2基（P35No.77, 78）祀られている。現在、観音寺は曹洞宗、廃寺となった正福寺mは真言宗であるが、この石祠の名号は日蓮宗系のもので、「妙正大明神」とは疱瘡神のことである。中田悌之助氏は先崎鷺神社の疱瘡神の事例から、「疱瘡信仰の立地」を「村境を侵入する悪霊悪疫から守る辻の靈域に臨んで鎮座している所」（註3）と記しているが、ここもかつては境谷を渡って成田街道へ通ずる細い小道の入口であった。今は「子安様」として、サブロー家からキューベ家のおばあさまが引き継ぎ、新年の注連縄などをして守っている。

高津には、ゴルフ練習場の右手奥に、中世に築かれた高津館址の土塁や堀が残っている。

ムラのたたずまいを見ると、この土塁手前の部田沿いと土塁奥の郭にあたる部分には中世から屋敷が並んでいたように思われる。すなわち、辻切り④～観音堂n（埋葬）～「妙正大明神」石祠～妙見社o～道祖神に囲まれた範囲（P46 図のA）が、ムラ内の中でも最も古くからムラの生活が営まれた核となる集落ではないだろうか。

ここからシntax（新宅）が、西や新田、石橋の東側へと広がって近世の終わりには現在の辻切りに囲まれた集落（P46 図のB）、すなわち明治前期の迅速測図が示すような集落を形成していったと考えられる。（P47 図3 参照）

6 ムラ境の祭祀と構造

ムラは辻切りや道祖神などの幾重もののバリアで守られ、ムラ内の安寧を祈願してきた。ムラ境の外は魑魅魍魎が跋扈する異界であり、疫病も災難も道を通じてムラの外からやってくると信じられていたからで、特に鬼門（東北）や裏鬼門（南西）は嚴重な守りが必要であった。

これら民俗信仰として祀られるムラの境界は、水田などの所有権や行政上の町村の境とは必ずしも一致しない。高津の事例では、生活道路を機軸に家並の端、そこから少し外へ行った畑の中の道の分岐点、さらの外側の山林の奥の分かれ道や坂、そして（あまりはっきりしていないが）隣村との境など、図2のような3～4重の同心円状の境界線があり、それは産土神社の氏子居住地を中心とする伝統的な「ムラ内」意識と日常的な交通路や陰陽道の方位説などに支配される祭祀のラインでもある。

また高津の場合、両墓制による埋葬地（ラントウバ）pや馬捨て場（ソウマント）が居住地の外にあること、また高津比咩神社から聖地の三山（御山）への道はそれらを避けているなど不浄と聖の区別がはっきりしている。一方、近世に成立した高津新田では、各屋敷内か屋敷に隣接してイエゴとの墓地が営まれており、墓制もムラの成立した時代の反映とすれば、高津は中世的な意識と習俗を維持してきたといえるであろう。

現代は境界や異界という概念が薄れ、交通の障害となる路傍の祭祀物は片付けられ、辻切りを存続している旧村も少なくなった。高津も八千代台団地・高津団地や都市計画道路の建設などでよりいっそう都市化が進んでいて、今回の調査が遅れれば「咳神様」なども不明になる直前であった。

最後に今回、本会会員と調査にご協力いただいた高津の方々により、これらの2004年現在の路傍祭祀の貴重な記録ができたことを感謝します。

参考資料

註1「船橋市域の風邪・咳の神様」『房総石造文化財研究会会報』第11号（1982）

註2「印西町の咳神信仰」『印西町の歴史』第11号（1995）

註3「先崎鷲神社と大江山伝説」『佐倉市史研究第16号』平成15年

『明治前期測量 2万分1 フランス式彩色地図 復刻版』（財）日本地図センター

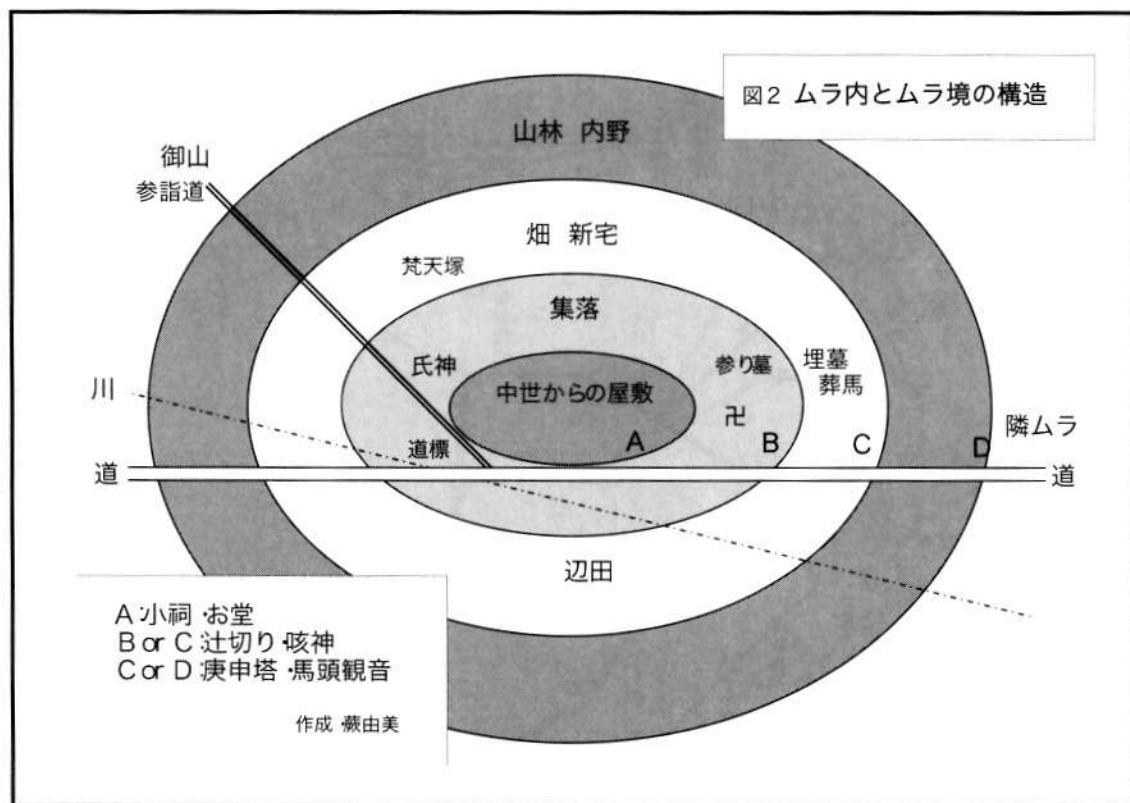


図3 高津の屋号
明治前期の想定復元地図

聞き取り調査による通称屋号を
明治前期の地図に加筆

×に数字はツジキリ

調査作成：蔵由美

表1 高津の辻切り (2004年1月25日)

	ニワ	場所 (高津内の地名は小字)	担当	辻切りの呪物
①	新田	北田と大和田新田の境 坂の分かれ道(三叉路)、咳神様のある 角の家の垣根	ヘイシロウ家	高津比咩神社のお札・ヤツデ・お米・胡椒の粒を小さな紙におひねりにしたもの 以上を小さなポリ袋に入れて、垣根の下の方に、結びとめている
②	新田	永森と大和田新田の境 下田食堂の脇の細い道のチョウベ家の 垣根の角	チョウベ家	高津比咩神社のお札
③	南	和田と新山の境 岩井自動車工業の角のフェンス、 向かいに馬頭観音塔(道標)がある	ハンベ家	縄(昔は道を横断したが、今は丸めてある)、 高津比咩神社のお札(丸めてポリ袋に入れてある)、 ヤツデの葉、ヒイラギの枝、トウガラシ、半紙に包んだ お米、蛇の目を書いた紙に包んだ線香、ニンニク の球根、幣束を縄に挟む。
④	南	部田と宮ノ前の境 馬頭観音塔の横	オトエム家	
⑤	中村	門原と大門の境 江野沢電気向かいの信号の先の電柱	マゴイム家	縄、高津比咩神社のお札、ヤツデの葉、ヒイラギの 枝、トウガラシ、半紙に包んだお米、蛇の目を書いた 紙に包んだ線香、ニンニクの球根、
⑥	西	西海道と大門の境 高津西公園入り口の松林	カゼム家	
⑦	西	西海道と西と小谷の境 高津団地入り口の十字路の笹藪	ジゼム家	
⑧	中村	中村と北田の境 東高津中学の前の畑の垣根のポール	マゴイム家	

2004年調査：蔵由美

表2 咳神信仰の調査リスト

	場所	通称	形態	いわれ・伝承・文献
1	八千代市桑納 道標と墓地のある 三叉路	シャブキ バアサン	石碑「咳漱婆之墓」昭和10 年改葬の銘	「風邪の神様」という 2001年はツジギリをしていた(現在は 不明) 『よなもと今昔』13号 1998年
2	八千代市米本 米本城跡三の丸土 塁上	しろぬし さま シャブキ 神様	武蔵式板碑 康永三年(1344)銘 竹筒が供えられている	「米本落城の際、隠れていたが咳をし て敵に見つかり、殺された老兵の墓 石」という 『八千代市の歴史』昭和54年 『八千代市の歴史 資料編 民俗』
3	八千代市高津 大和田新田との境 の坂の分岐のツジ ギリの場所にあっ たが、2004年3月 に観音堂前に移転	咳神様	石碑「地藏堂跡」の刻字あり。 裏面は地藏像胴体部分だった もう一基石塔があり、観音寺の 墓地にかつて移転したが、最 近、無縁墓石群の中に整理され て特定できない	「お姫様が逃げて咳をしてつかまっ た」(ヘイシロウ家のおばあさん) 「チョウベエの家に働きに来ていた 許されぬ仲の男女が、一緒に逃げよう として咳をして捕まり殺された」(チ ョウベエ家のおばあさん) 2004年1月筆者が聞き取り
4	八千代市村上元 は、下市場との境 にあったが、区画 整理により16号 線西側ジョイフル ホンダ駐車場向か いの墓地に移転	けんけさ ま	墓石「法印権大僧都憲海不生 位」享保三年二月十七日の 銘	咳の出た人は竹筒にお茶を入れお参 りすると咳がなおる お礼参りに新しい竹筒を1本お供えす る 八千代市文化伝承館長のご教示によ る
5	八千代市米本 米本下宿東の米本 五差路から墓地へ 通じる道へ入る	すわり地 蔵	106cmの地藏坐像 背中に「女 房衆念仏講同行23人寛文1 3年・」の銘	子育地藏として信仰され、咳がひどい ときは、お茶を供えるとすぐ治るとい われている 善福寺境内の地藏とけんかして、背中 を切られて負けたため、現在のところ に座らせられていると言う 「史談八千代」第21号

6	八千代市佐山 元は佐山のゲート ボール場近くの 原、馬頭観音のそ ば	乞食の墓	墓石 八千代市伝承館長のご教示に よれば、平戸のあさひ霊園に移 されたが、無縁塚に整理され、 他の墓石と区別できない	行き倒れの乞食を葬った墓で、竹で作 った小さな桶に酒をいれ、供えると咳 止めに効いたが、壊されてしまったと いう 『八千代市の歴史 資料編 民俗』
7	佐倉市先崎 鷲神社の向かい もと正覚寺があっ た場所で先崎城址 に隣接	三五八様	「俗名佐五八」銘の墓石 表面が削られている	「じんべいさん宅」の先祖が祭ったと されている
8	佐倉市小竹 小竹城址の近く出 羽三山塚の右横	風邪の神 様	大日如来石像	『志津の史跡と名所』宮武幸吉
9	佐倉市青菅 青菅小学校奥の墓 地内	しゃびき 婆さん	観音像石仏 高さ11cm「天明三年」の銘	咳を治す功德のある仏として崇めら れてきた 尼の堂守りだというのがなぜ観世音と して祀られたかは不明
10	佐倉市下志津 上峠城址に隣接し た畑の中	ちゃぶく ばあさん	榎 竹筒をつるす	今でも子どもの風邪に効くらしい 盆と暮れにはお茶と黄粉とお米をあ げる
11	佐倉市上座 臼井城大手近くの 手繰橋の西側上座 公園入り口	咳神様		天野会員のご教示による

12	佐倉市臼井田 臼井城跡から東南 へ500m	おたつ様	右の延享4年(1747)造立 の石祠	臼井城主であった臼井祐胤の死後、後 見人の叔父、志津胤氏によって竹若丸 の殺害が企てられた時、乳母阿多津が 竹若丸を助けて鎌倉に逃がしたが、阿 多津は胤氏の配下の者に追われ、印旛 沼ほとりの葦原に一時隠れ、咳をした ために捕らわれて殺害された。 村人はこれを哀れみ、祠を建立し、阿 多津を祀ったという。 HP「佐倉市の文化財」
13	佐倉市土浮 「草ぶえの丘」前 の「市民の森」内 の佐倉と土浮を結 ぶ旧道	おわばさ ま	祠の中の墓石 「即夢休心信士/即如妙心信 女」の銘	姫が男を好きになったが身分違いか ら許されず、男を連れて東国に逃れ、 この地で咳をして見つかり追っ手に 殺された。村人が哀れに思い、風邪の 神様として祀った。風邪をひくとお茶 とむぎこがしを持ってお参りした。 『佐倉市史研究』第2号昭和59年
14	佐倉市大蛇町 大蛇町の全農家畜 衛生研究所敷地内 もとの所在は転々 としていた	栗切り婆 さんの墓	墓石	栗切り婆さんは、他人の栗を切り取 り、潜んでいる時、咳をして捕らえら れ、お咎めをこうむった。その墓に咳 の平癒を祈るとよく治った。お礼に竹 筒に茶を注ぎ供えたという
15	市川市国分 国分寺裏の坂の途 中	腹切りさ ま	墓石	昔酒に酔った武士が切腹したお墓 『いちかわ民俗誌』 萩原法子
16	市川市下貝塚の大 野との境、昔は山 だった。	こんこん のんのん さま	祠に入った墓石	咳に苦しんでのたれ死んだ老人が、祀 るよう夢知らせをした 『いちかわ民俗誌』 萩原法子
17	千葉市若葉区大井 戸町 大宮神社北の茶畑 の中	姥の墓	中世五輪塔の空風輪と武蔵式 板碑の残欠	大井戸館址にいた姥の墓で咳の神様、 風邪の神さま、足の神さまと云われ、 具合の悪くなった人に信仰されてい る。治ったら、甘酒をあげる。 HP：千葉市の遺跡を歩く会

18	千葉市幕張町堂の山「大日堂」があった場所	かぜひき地藏	祠の中の地藏石像	「風邪をひいたときお祈りすると、風邪が治る」とのこと HP：千葉市の遺跡を歩く会
19	墨田区向島 5-3-2 弘福寺境内	咳の爺婆尊	老婆の石像	寺伝では、相州真鶴山中の洞穴内に風外和尚が刻んだ父母像で、小田原城主稲葉正則公が自邸に祀り、弘福寺に寄贈した。「風外」の字から風除けのご利益が信仰された（住職談） 柳田国男『日本の伝説』昭和4年
20	新宿区新宿 2-15-20 正受院境内	子育て老婆尊	髻衣婆尊木造（像高 70cm）片頭巾状に綿を被っている	咳止めに霊験があるとして、幕末の嘉永二年(1849)頃はやり、江戸中から参詣人をあつめ、錦絵の題材にもなった